

NEWSLETTER

第6回研究大会報告

日時:2012年3月19日(月) 場所:関西大学岩崎記念館

1. 実践報告:「小学校英語教育における授業分析シートについて」
田尻利恵子(関西大学初等部)
2. 参加者全員による討論会
3. 基調講演「新時代の英語教育研究」
講師: 田尻悟郎(関西大学外国語学部教授)

会長 西川先生 挨拶



前任の八島智子の後任として会長を引き受けて、1年となりました。この間、会長としての職責をなんら果たすことなく過ぎ去ってしまいました。そんな会長を当てにせず、役員のみなさまの献身的な努力・取り組みにより、先日も研究大会を成功裏に開催することができました。役員の方々には心から感謝申し上げます。

外国語教育は、常に「理論と実際」を繰り返していかなければなりません。いくら理論を身につけていても、教育現場は千差万別で、教室ごとに違い、生徒も個性があるので、個人個人に合った指導をしなければなりません。

そういう意味で、この学会は、外国語教育においては理想的な学会であります。会員は、当然大学院生と社会人(教員)によって運営され、常に双方からの意見交

換がなされ、理論面だけでなく、実際の教育現場からの情報が常に行き交うことができます。ややもすれば理論研究に偏りがちな院生にとっても、必要な情報を得る場といえます。

そのような、自由に意見交換ができる本学会にも、悩みが生じています。それは、会員の恒常的な増加が見られないことです。いま、役員さん達によって、その重要な問題を解決すべく、事あるごとに検討がなされています。なかなかすぐには解決できない問題ですが、より多くの方々が集まり、知恵を出し合って、本会の更なる発展を模索していかなければならないと考えております。

第7号 2012年11月発行

目次

1. 第6回研究大会報告
西川会長挨拶
2. 神道美映子研究大会委員長からの大会報告
田尻理恵子氏(関西大学初等部)実践報告
3. 参加者全員による討論会
4. 田尻悟郎氏(関西大学外国語学部教授)の基調講演
5. 研究会報告その1
6. 研究会報告その2
7. 研究会報告その2(続き)
関西大学外国語教育学研究科創立10周年記念シンポジウムのご案内
8. 学会からのお知らせ
編集後記

第6回研究大会報告 研究委員長 神道美映子

去る3月19日(月)、岩崎記念館に於いて関西大学大学院外国語教育学会第6回大会が開催されました。今回は「外国語教育の活性化をめざして」を大会テーマとし、遠方からの参加者を含む50名あまりの出席者を得て、成功裏に幕を閉じました。

基調講演では、関西大学教授の田尻悟郎先生をお迎えし、「新時代の英語教育研究」というテーマでお話しいただきました。具体的な授業の実践例から、教育の基本理念にまで及ぶ内容に、日本の外国語教育のあり方について、改

めて深く考える機会が得られました。中でも、学習者の学力向上の条件に、「教師の指導技術」とともに「教師の人的魅力」が挙げられていたことは、教員を志す学生にとって、また、現職教員にとって内省を促す機会になったことと思います。

実践報告では、小学校英語教育における授業分析シートを用いた教員研修事例と、その成果と課題についての報告がありました。その後の討論会には、小学校・中学校・高等学校・大学・塾の教員が参加し、授業評価における共

通の視点について、学校種を越えての議論がなされました。

さらに、大会終了後の茶話会にも、多数の方々にご参加いただき、情報共有と交流の場を持つことができました。お忙しい中、予定を変更して茶話会にご出席くださった田尻先生に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

最後になりましたが、大会の準備にあたりご尽力下さいました会長の西川和男教授、田尻利恵子幹事長、そして学会役員の皆様にも、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

実践報告：小学校英語教育における 授業分析シートについて

田尻理恵子氏(関西大学初等部)

研究大会の実践報告に於いては、田尻氏らによって作成された小学校における英語授業の分析シートに関して、作成の簡単な経緯、シートの項目の簡単な説明、実際にシートを用いた授業の分析例などが提示された。

そもそもこの評価シートは、昨年小学校で「外国語活動」が必修化されたことに伴う現場の教師の不安感軽減の為に開発を試みられたということである。

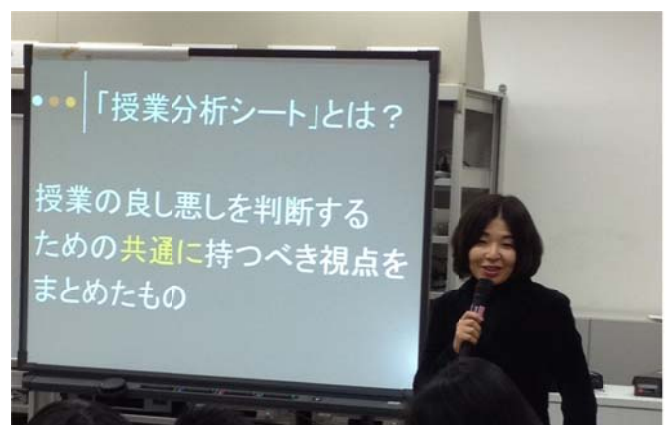
シートの項目は8項目あり、授業の良し悪しの判断のために教師が共通して持つべき視点をまとめたものという説明であった。

後半はビデオ録音された授業を実際にシートを用いて分析された事例の報告であった。授業の内容を項目別に評価できる点は良いものの、児童を主眼とした項目の不足や項目の文言の問題点も明らかになったということである。

現在のシートが完成形ではなく、今後も使用者の声を反映させ、より良い評価シートの作成を目指していらっしゃるということである。

今後も研究を続けていただき、より現場の先生方の役に立つシートとなるように研究を続けていきたいと感じた。

(佐藤浩子)



参加者全員による討論会

田尻利恵子先生: (齋藤栄二先生へ)「外国語教育の活性化をめざして」と題し、その効果的方法にはどのようなものが考えられるか。

齋藤栄二先生: 質問のできる生徒を育成することが大切であり、それによるメリットはとて多い。教員が一方的に話す講義形式では1年経っても生徒の力は見えない。生徒の質問によって、何がわからないのか問題点が見え、interaction が密になり、クラスの実態がわかる。

田尻利恵子先生: その質問は英語(学習言語)と日本語(母語)のどちらでさせるのか。

齋藤栄二先生: 生徒からの質問は母語でいいが、教員が後で英語でどのように表現するのか教えるのがよい。これにより、授業でのインプットも増える。覚えることを強制する必要はない。

田尻利恵子先生: (予備校の先生から見て)「外国語教育の活性化をめざして」と題し、その効果的方法にはどのようなものが考えられるか。

予備校講師: 教育者による責任転嫁が問題である。大学教員は「高校教員はなっていない。」といい、高校教員は「中学校がダメだから、こんな生徒がいる。」といい、中学校教員は「小学校では素人が教えるから、ダメだ。」という。私自身、「センター試験の内容が悪い。」と責任転嫁した一人でもある。このような連携がとれない状況は悪循環であり、共通認識をもった流れを作らなくてはいけない。

齋藤栄二先生: センター試験のどのような点が良くないのか。

予備校講師: 傾向が年々変わるため、センター試験に向けての目標設定や学習態勢をつくるができない。センター試験を実施する意図が高校には伝わっていない。

田尻利恵子先生: 中学校で教えている先生方は、高校入試を分析して学習方法を検討したことはあるか。

中学校教員A: 大阪府の入試の作文問題が易しい。書く意図がはっきりしないので、対応できない。

中学校教員B: 勤務校の生徒は学力が低く、作文を書く力を要求すると、教員と生徒との間に溝ができてしまう。目の前の生徒のモチベーションを上げることで精いっぱいである。入試に対応できる力を何とかつけさせたいのみで、入試問題について深く分析するまでには至らない。

中学校教員C: 私立の学校に勤務しているが、塾でも学力トップにいる生徒が高いスコアをあげている。99%の生徒が塾に通っている。塾ではパターンをたたきこまれ、ゲーム感覚で学んでいる。そのため、学校では卒業



文集を100語で書くことを目標に授業展開しているが、入試とかけ離れた内容のため、一方では入試対策も行っている。ただ、入試対策と生徒を惹きつけるような内容を両立させるのは難しく、塾とのせめぎ合いの問題もある。また、学力の高い生徒だけでなく高校へ行くのが難しい生徒もおり、実際には学力差の問題も抱えている。

田尻利恵子先生: (大学教員から見て)「外国語教育の活性化をめざして」と題し、その効果的方法にはどのようなものが考えられるか。

大学教員A: 受けもつクラスは数人~100人と幅広いが、どのクラスでもペアワークなど全参加型を心がけている。大変懸念しているのは、大学の先生が学生のレベルを知らないことである。高校でも中学校や高校の学習指導要領に目を通しておらず、生徒たちがこれまで何を学びこれから何を学ばせなくてはならないか知らない教員もいる。中学校の先生は小学校の、高校の先生は中学校の、大学の先生は高校の指導要領を読み、生徒/学生の学習進度を知っておく必要がある。

また、CEFRのCan-do statementがNHKの基礎英語に導入され、早稲田大学や慶應義塾大学でも利用されているが、そのまま転用するのは良くない。アジアを中心とした指針を作る必要があり、実際にそのような動きも始めている。

齋藤栄二先生: (学習指導要領の問題について) 検定済教科書を用いて授業をしていけば、学習指導要領から外れることはないので、学習指導要領を知る必要がないという考え方もある。

大学教員A: 入試に学習指導要領から逸脱した文法事項が入れられており、学習指導要領を知らないという問題を痛感した。

(鷹野由紀子)

基調講演:『新現代の英語教育研究』

田尻悟郎氏(関西大学外国語学部教授)

多忙を極める田尻先生だが、本学会の研究大会ひいては日本の英語教育のために時間を割いてくださった。この日も午前中はテレビの収録、午後からは外国語学部教員の会議があり、会議後すぐに基調講演にきていただいた。田尻先生の講演を目当てに遠方からも多くの方々が聞きに来てくださった。

最初に4月から始まる新番組、『テレビで基礎英語』の内容からふれられ、どうすれば発音がよくなるのかの具体例を提示してくださった。体育系の学生たちが反復横跳びをしながらきちんとした発音をするようにさせる工夫は、田尻氏ならではのアイデアである。社会に出て仕事につかせるためにはどうすればよいか。英語の授業の中で人生を豊かにするためのことを教える必要があると説かれた。

授業はわからないことがわかるようになり、できなかつたことができるようになること。中・高では生徒ではなく先生ががんばっているが、頑張らせるのは生徒のほうである。授業者は研究の種類を教材研究、授業研究、成果研究に分け、授業の中で生徒の動きをよく観察し、動きが悪い時は生徒に聞いてフィードバックをした方がよい。生徒一人一人が理解しているかを授業中にチェックすること。間違つた方向への研究をしない。子供たちのことをよく知り、理解することが必要だ。

教育現場では目の前の生徒のことで教員は一杯一杯になってしまうので、大学在学時にすべての教科書をインプットしておくといふ。現場では生徒を見て研究すること。教材研究は一人でやっても思いつかない。いい考えを持っている人からもらうのがよい。指導案や教材研究を共有して、先人の知恵を活用すること。

提出物から成果がわかる。生徒にも成果がわかるような課題を出すこと。ハンコだけ押して返さない。提出物で人間関係が決まる。伸びているのがわかる。先生も頑張っているのがわかると生徒も頑張る。Can-do リストは子供たちへの道しるべとなる。もう少しの時は生徒と交渉し、もう少し頑張らせる。

みんなが積み上げてきたものを共有しないといけない。先人の発明の上に立っている。教育に光を！ 気づいたことを積み上げて、次世代につなげていく。

フロアからの質問:

質問1:リーダーを育てていくことが大事だと分かったが、具体的にどのようにすればよいのか。

田尻氏:友達同士で助け合う。教えあう。関わらせる。教えて感謝されたことの成功体験、または逆にされた体験をさせる。解決策を見つめることができる。いやな思いをしないように協力し合う。一つの活動だけでやらない。2つめ、3つ目の教材を用意しておいて、友達に協力させるようにする。



質問2:北九州で予備校の講師をしている。中→高→大の英語教育について、受験に対応できるのか。

田尻氏:自力をつけさせれば入試に対応できるが、その逆はよくない。自力とは語彙やドリルのこと。子供が嬉々とするのができればよい。高校ではやっていることは悪くないが、達成感を感じさせることができない。高校が一番変わらなければいけないが、高校が一番面白い。中学は遊びすぎ。

(船越貴美)



研究会報告 その1

昨年11月13日(日)仏文学会と合同で研究会が開催されました。午後からは日仏教育学会との合同研究会となりました。参加して下さった皆様、ありがとうございました。

プログラム:

10:00~12:00 インプロ・ワークショップ
大島ひでこ(インプロヴァイザー)

13:00~14:00 [英語教育の部]講演
齋藤栄二(京都外国語大学特任教授)
「日本の小学校における英語教育の現状と展望」

14:10~17:00 公開シンポジウム
ジュヌヴィエーヴ・ガイヤール
(フランス国民教育省初等英語総視学官)
「小学校における英語教育の日仏比較」
※[英語教育]の部は、日仏教育学会との合同

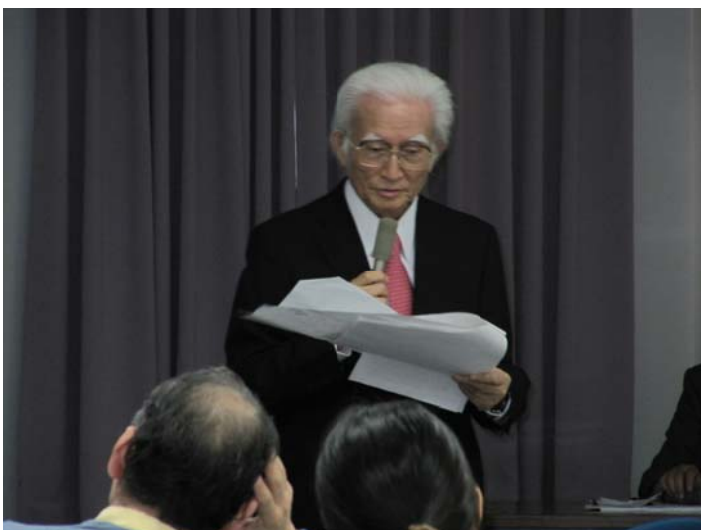
3:00-15:00 [中国語教育の部]授業実践研究
山崎直樹(関西大学外国語学部教授)

「英語教育の部」講演
齋藤栄二(京都外国語大学特任教授)
「日本の小学校における英語教育の現状と展望」

大島ひでこ氏によるインプロ・ワークショップ実践中です。コミュニケーション能力を高める効果があります。



[中国語教育の部]授業実践研究
山崎直樹(関西大学外国語学部教授)



研究会報告 その2

去る6月10日(日)13:00から岩崎記念館にて研究会が開催されました。今回は2部形式になっており、修士論文執筆中の方、また個別に相談をされたい方、データ分析処理でお悩みの方等に役立つ研究会となりました。参加してくださいました皆様、どうもありがとうございました。

プログラム:

- 12:30 - 13:00 受付開始
- 13:00 - 13:15 開会式
- 13:15 - 13:45 修士論文執筆について
(山岡浩一氏)
- 13:45 - 14:30 論文個別相談会
(相談員:修了生)
- 14:30 - 14:45 休憩
- 14:45 - 16:15 パネルディスカッション
「データ収集・分析の困難点と克服法—私たちの経験から—」
山根繁教授・名部井敏代准教授
- 16:15 - 16:45 総会
- 16:45 - 16:55 閉会式

修了生の萩野氏は日本語専攻の論文個別相談に参加してくださいました。



修士論文執筆について語る山岡浩一氏。様々な苦勞を乗り越えて完成に至りました。引き続き博士論文の作成に取り組んでいらっしゃいます。



山岡氏は論文個別相談会(英語)にも参加してくださいました。



中国語の論文個別相談会に特別参加して下さったのは、なんと(!)西川会長でした。

山根先生と名部井先生のパネルディスカッション。お二人の研究過程を知るよい機会でした。



関西大学外国語教育学研究科創立10周年記念シンポジウム 『外国語教育学の未来--理論・実践・検証』のご案内

関西大学外国語教育学研究科では、創立10周年を記念して、下記のシンポジウムを開催します。多数のみなさまのお越しをお待ちしております(参加無料ですが事前申し込みが必要です)。

日時: 2012年11月24日(土)
場所: 関西大学千里山キャンパス100周年記念会館(※参加無料、事前申し込みが必要です)

◆9:50-10:50 染谷泰正(関西大学教授)
講演: 大学での英語教育における通訳・翻訳の意義 — ヨーロッパ共通参照枠(CEFR)によるコミュニケーションのための言語活動の新たな定義に関連して

◆11:00-12:00 八島智子(関西大学教授)
講演: 多文化世界の外国語教育研究: コミュニケーション論的転回

◆12:00-13:00 ポスターセッション: 研究科修了生による成果発表

◆13:15-14:45 當作靖彦(カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)
講演: グローバル時代の言語教育 — 言語の位相の変化と対象領域の拡大

◆15:00-16:00 研究科修了生によるパネルプレゼンテーション: 教育の現場で生かす研究科の学び

◆16:10-17:50 Merrill Swain(トロント大学名誉教授)
講演: Affect, cognition and linguistic performance: theory and practice

<詳細な情報と申し込み> 下記のページのリンクをご参照ください。

http://www.kansaiu.ac.jp/Gr_sch/fl/symposium.html

<問い合わせ> 関西大学政外オフィス
10anniversary@ml.kandai.jp

学会からのお知らせ

先日、仕事の合間に、何げに雲一つない空を眺めていました。吸い込まれるようなスカイブルーの青空にため息が出ました。しばらく経ってから、締切間近の仕事に戻ると、頭がスッキリ爽やかになりとても仕事がはかどったような気がします。自然っていいですね。

さて、前置きが長くなりましたが、6月10日(日)に行われた総会にて本学会の名称が変更(旧:「関西大学大学院外国語教育学会」から新:「関西大学外国

語教育学会」)されました。設立以来、先生方をはじめ、会員の皆様のおかげで研究会、研究大会を微力ながら開催することができ、その都度、ニュースレターでご報告させていただきました。今年度より、名称を改め、外教設立10周年記念シンポジウムも開催され、今後益々の本研究科の発展にむけて、本学会もより充実した研究会、研究大会をご提供できるように役員一丸となり運営を行っていききたいと思います。なかなか行き届かない点もあるかと思いますが、これからも、どうぞよろしく

お願い申し上げます。今後どのような学会に発展させていくべきか、また、どんな研究会、研究大会等が必要かなど、ご意見を頂戴し、これからの運営に生かしていきたいと思っております。本学会HPのトップページ左(<http://kufler-s.jp/>)の「お問い合わせ」をクリックして頂き、ご意見等お待ちしております。



編集後記:

今夏も昨年以上に記録的な猛暑となり、台風の被害も甚大でした。残暑も厳しく、10月中旬まで暑い日が続きましたが、みなさまお変わりありませんか？

学会では役員メンバーも代わり、ようやく Newsletter 第7号の発行にこぎつけました。年1回の研究大会と研究会に会員の皆様もどうぞふるってご参加ください。(Y.F.)